



PISA

IN FOCUS

5



education policy education policy education policy education policy education policy education policy education policy

生徒はどのようにして自らの社会経済的背景を克服しているか？

- OECD加盟国全体では、31%の恵まれない家庭の生徒が「不利な状況を克服」している。つまりこれらの生徒は、国際的に、同じような家庭出身の生徒の中でも最も成績の良い者であることを意味している。
- 不利な状況を克服した恵まれない生徒と、そうでない生徒の主な違いは、克服した生徒の方が学校の通常の授業をより多く受けていた点である。
- PISA調査の結果、自信があり、やる気のある生徒ほど、不利な状況を克服する確率が高くなることが示されている。

貧困のサイクルは、 社会経済的に恵まれない生徒は、学業成績が悪い、
不可避ではない。 就職の見込みがない、貧困という世代間サイクルを
 永続させることを運命づけられているのであろうか。もしこの生徒が、正規の授業
 をより多く提供してくれる学校に通うならば、それは運命にはならない。

PISA2006年調査とPISA2009年調査では、恵まれない家庭出身であるという事実にもかかわらず、学業成績で高いレベルを示した、不利な状況を克服した生徒が存在する。これらの生徒は、困難な状況を克服して、同じような社会経済的背景にある同級生たちよりも良い成績をあげており、国際的な生徒の順位で上位4分の1に入っている。

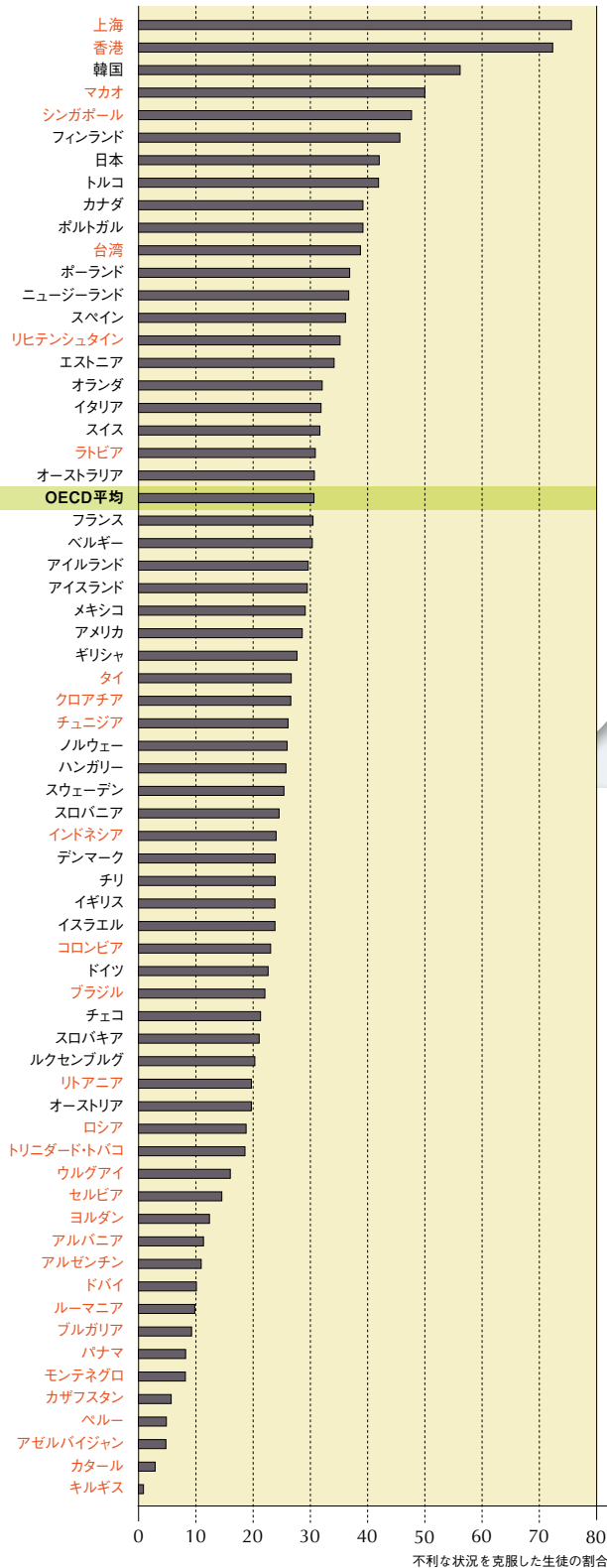
PISA2009年調査において、OECD加盟国全体で、ほぼ3分の1の恵まれない生徒が、「不利な状況を克服」したと考えられている。実際、韓国、非OECD加盟の香港、マカオ、上海では、恵まれない家庭出身の生徒の大部分が困難を克服したと見なされている。カナダ、フィンランド、日本、ニュージーランド、ポーランド、ポルトガル、スペイン、非OECD加盟国・地域のリヒテンシュタイン、シンガポール、台湾でもまた、35%以上の恵まれない生徒が、不利な状況を克服している。



PISA

IN FOCUS

恵まれない生徒のうち、
不利な状況を克服した者の割合



出典: OECD, PISA 2009 Database, Table II.3.3.

不利な状況を克服するために 必要なもの: 教室で過ごす時間…

生徒の科学的リテラシーに焦点を当てた PISA2006年調査の結果では、かなりの割合の恵まれない生徒が理科でPISA調査の基準となる習熟度レベル2にさえ達していないことがわかった。これらの生徒は、社会に本格的に参加し、生涯を通して学習を続けるのに必要とされる技能や能力を身に付けずに学校教育を終える危険性がある。

そこで、生徒が社会的背景を克服し、学校で高い得点を達成するには、どのような支援ができるのであろうか。「不利な状況の克服」に関連する1つの要因は、教室でより多くの時間を過ごすということである。PISA2006年調査の結果を分析したところ、多くの恵まれない生徒が、恵まれた同級生よりも学校で

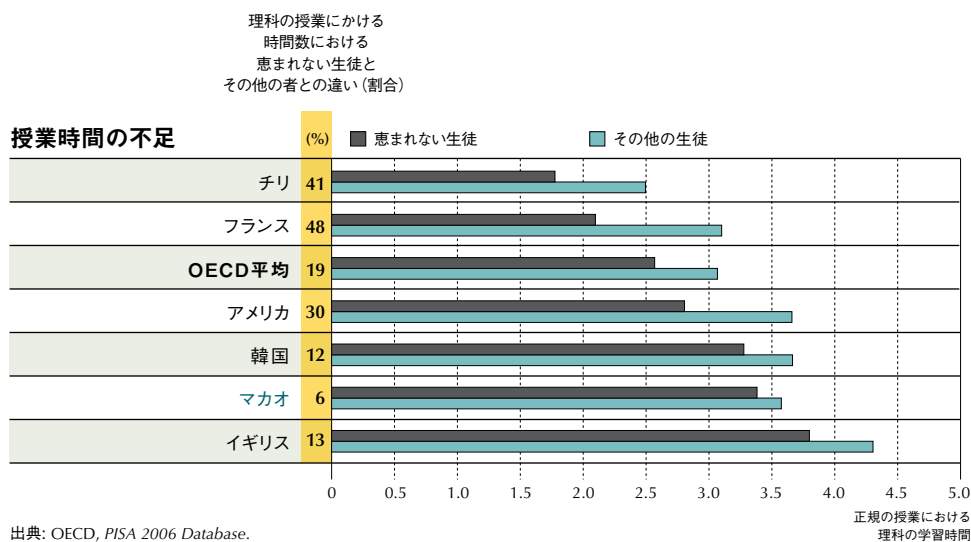
理科を学習する時間が少ないことがわかった。比較的恵まれた生徒が通常の理科の授業を週3時間以上受けて

いるのに対して、恵まれない生徒は週に約2時間半しか受けていない。恵まれない生徒が同級生よりも良い成績をあげるかどうかの最も重要な予測因子の1つが、学校での学習時間なのである。実際、すべてのOECD加盟国と非OECD加盟国・地域で、不利な状況を克服した生徒は、成績の良くない恵まれない家庭出身者に比べ、学校での理科の学習時間が長い(平均して、週1時間から2時間以上)。例えば、フランス、ドイツ、オランダでは、不利な状況を克服した生徒は、成績の良くない恵まれない家庭出身者に比べ、少なくとも理科の授業を週1時間45分も多く受けている。

出典: OECD, PISA 2009 Database, Table II.3.3.



国によっては、恵まれない生徒がクラスで十分な時間、授業が受けられるように保証する様々な方法(コースを必修にすることなど)がとられている。例えば、アメリカでは、理科の授業への出席を必修にすることが、生徒の成績の緩やかな改善に結びついている(PISA調査の科学的リテラシーの得点でおよそ15点)。恵まれない生徒においては、成績の改善は40点以上と3倍になっており、これは学校教育1学年分に相当する。オーストラリアでは、必修の理科のコースがある恵まれない生徒の不利な状況を克服する可能性が、必修の理科のコースがない恵まれない生徒よりも、生徒の社会経済的背景の影響を考慮した後でさえ、4倍高い。



…やる気と自信 不利な状況を克服することに関連する別の要因も存在している。それは、生徒の自らの学力に対する自信である。PISA調査の結果を見ると、自信のある生徒ほど、不利な状況を克服する確率が高くなっている。PISA2006年調査の研究結果から、OECD加盟国の不利な状況を克服した生徒の50%以上が、「理科なら、より高度な問題でも自分にはやさしい」と考えていたのに対して、成績の良くない恵まれない家庭出身者では、約40%しかそのようには考えていない。約75%の困難を克服した生徒が「理科のテストでは、たいていうまく解答することができる」と考えていたのに対して、成績の良くない恵まれない家庭出身者でそのように考えている者は約50%しかいない。また、やる気、それも外的な刺激(特定の仕事に就ける見込みや給料のような)によって促進されるものではなく、個人的、内的衝動から起こるやる気は、多くの国で生徒が困難を克服することと、弱いながらも関連している。

不利な状況を克服した生徒とは?

不利な状況を克服した生徒とは、その国の生徒と比較して社会経済的に恵まれない家庭出身で、国際的な基準において高い成績をあげている者のことである。国際比較を意義あるものとするため、生徒自身の背景と同様に、その背景と成績との全体的な関係性が考慮される。

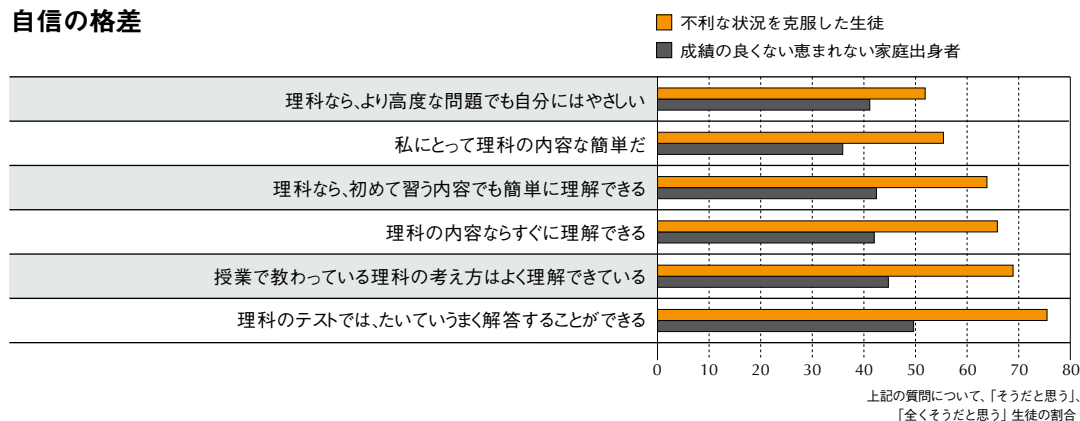


PISA

IN FOCUS

これらの研究成果のすべてで、不利な状況の克服を促進する上で、学校が重要な役割を担っていることが示唆される。学校はまず始めに、学習を奨励するような発展的活動、教室での実践、教授法によって、恵まれない生徒の教室で学ぶ機会を増やすことができ、そして、そのような生徒のやる気と自信を育てていくことができる。例えば、質の高いメンター制度は、特に有益であることがわかっている。これらの活動を恵まれない生徒を対象に行うことは、これらの生徒が他ではこのような支援を受けることがまずないため、極めて重要である。

自信の格差



学校で過ごす時間を増やすことは、それ自体では、全員の成績を改善するものではないが、PISA調査の結果に従えば、恵まれない生徒の成績を向上させる政策を立案する際には、学校での学習時間は考慮されるべきである。このような生徒の多くが、理科の(おそらくはあらゆる学術的な)コースを履修する選択肢もほとんどなく、機会もないような進路や学校に行きついているのかもしれない。機会が与えられるならば、生徒は成功できるかもしれないが、その機会が許されないのであれば、成功することは不可能である。

結論: 恵まれない生徒は、その機会が与えられれば不利な状況を克服でき、実際に克服している者も多い。不利な状況を克服するために、これらの生徒が潜在能力を生かすことができるよう、平等な学習機会を提供し、自信ややる気を育てることが必要である。

本稿に関するお問い合わせ先

担当: Pablo Zoido (Pablo.Zoido@oecd.org)

出典: PISA 2009 Results: Overcoming Social Background: Equity in Learning Opportunities and Outcomes (Volume II) 及び Against the Odds: Disadvantaged Students who Succeed in School.

参考サイト:
www.pisa.oecd.org

次回テーマ:

「生徒が留年、転校する時:それは教育システムにとって何を意味するのか?」

本稿の翻訳は、日本のPISAナショナルセンターが担当しました。